

鳥は雲に

丸山佳子

砂ぶくろ浮きぶくろにも梅雨が明け

田の神は無限の若さ青田波

鳥は雲にわたしは近江富士一周

金輪際ふめぬお箸が登山口に





炎帝に波長の合はぬ物干され
初 蝉 や 掛 け よ 遊 べ と 一 岩 が
仕 合 せ そ ま る ま る ま る と 大 南 瓜
ど の 波 も 旅 人 に む い て 湖 水 澄 む
稲 に 花 地 球 ゆ る ゆ る 廻 り 欲 し
前 略 十 年 朝 顔 い ま も 嗟 峨 流 に

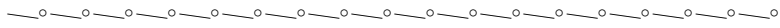


豊 田 都 峰

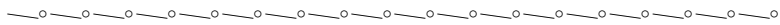
清響集 その九十

砂 防 杭 な か ば 埋 も れ 晩 夏 な る
ひ き ぎ は の 渚 泡 だ ち 晩 夏 な る
ほ ほ づ き を 鳴 ら し あ ひ し 日 い ま も み づ い ろ
川 風 の ひ る 寝 に 休 暇 つ か ひ る
昼 寝 覚 め し ば し ば 風 の あ や の な か
ふ た す ぢ の 山 ひ だ 彫 む 今 朝 の 秋





遠やまのひとつみづいろ秋立てり
高原の露台は星座のなかのもの
ががんぼのあがきあたりにある日暮
終章を加筆す嵯峨野の朝露に
ひぐらしの塗り込む杜は斎宮址
ひぐらしのさそふあたりは庵あと
つゆぐさをしるべの月日みづいろに
ひぐらしの染み込んでゐるわが句帳



秀華採集

かげらふのまぎるる源氏香のなか

武藤 ともお

今年は源氏千年紀。「千年紀」と詠えば趣がない。香と「かげらふ」のからまりの中に遠き『源氏』を偲ぶ構図はよい。

金雀枝や動体視力はからるる

井上 菜摘子

墓菌型ぐにやりと採られけり

奥田 筆子

前句の揺れをとれだけ正しく把えられるかに「動体視力」を、後句のよく似た感覚のものを、それぞれ組み合わせる力は拔群といつてよい。特に後句の意外性は驚きである。

近 詠

嵯峨あるき

鈴鹿 仁

嵯峨あるき色なき風のいろ探す
秋蝶に尋ねたづねし嵯峨古刹
潮どきと謂ふ時ありて水の秋
初あきつをの子めの子の真清まさやけし
初蟬やあの木この樹を熱くする
涼しさの風の真ん中法話聴く
小川文字姉追悼
嵯峨みちの今朝の夏菊濡れてをり

近 詠

妻逝く（七月二八日）その一

宇都宮滴水

雷光や妻の寝言を聞き洩らす
そのあとの言葉絶えけり残る夏
乾くまで哭き貌さらす流れ星
さまざまに吹く風のあり秋となる
悲しみの中の一闪雷走る
夏終る黒き手帖のペンのあと
号泣や妻の掌握り夏知らず

神麓集



新関 一杜
釣瓶落しは山本健吉作の季語
4 H 鉛筆握る流れ星
ガラシヤここで死に星流る教会に
無月の無口いつも泣きそな女が好き
べつたら市大伝馬町大はしやぎ

草 鹿 林 日 圓

秋日濃し草鹿式や歩射の的
秋うらら古式ゆかしく歩射の術
暮の秋鏑矢的を射ぬきけり
秋さやか騎射歩射ともに的射ぬく
爽やかに色とりどりの技を競ひ

東 北 道 北 村 香 朗

遠景に日光連山青田波
黒羽の二の軌跡は濃紫陽花
大輪に彩を競へる花菖蒲
那河川は鮎解禁の樟の数
燃費上りスイスイ緑の東北道

籬 木 藤岡 紫水
見だしなみ老いては約し白い靴
月涼し句碑に傾く松の影
師のこゑを聞きたく句碑に水を打つ
我が影の小さく蹤き来る日の盛り
籬木の残像白き影ばかり

湯 田 郡 和 田 照 海

柿の花掃かれてありぬ其中庵
どう見ても心字に非ず池浚ふ
河骨や仏足石のさすり艶
山頭火ただ今は留守柿の花
一石は青葉に翳る雪舟庭

蜀 葵 丸 山 冬 鳳

蜀葵群れても見事な小屋一景
深まりて葉蔭しづかな向い山
清しさの恵方間垣の蜀葵
軒下は禽聲施行の餌どころ
翅虫その日射し日の向きたち向ふ

神麓集



幸願ふ人のあふれる梅雨の裏
自分史に革命はなし河鹿鳴く
父の日や背に負ふ父が消えてゐる
狭くとも道は譲らず信長忌
夏の川いくつ渡れば夢醒めん

松田 都青

汗ばみて予後の経過を看に行く日
一病も土用を越すはよき便り
湯へ急ぐ湖西の旅館明易し
動けざる日々体温を越す暑さ
耳鳴の蟬声重ね丑三つ刻

高木 智

入水魂 彌寝 瓶史
芳一の弾き語り寝ね蟬涼し
七盛塚蟬わしわしと謎鳴きす
関門橋夏姿見せ船銀座
幼帝に雷神太鼓鳴らし過ぐ
荒潮の八百路夕焼け入水魂

冬隣近づくいてくる終電車
一條の秋水走る身の暗渠
草の名のにせやもどきやにごりさけ
するとんの昭和は遠し鳥渡る
雲間より日矢降臨す大刈田

冬隣 竹貫 示虹

港町雨には低く来る燕
目礼ですます互に日傘さし
話さずにわかり合ふ仲心太
桐の花いつもの辻に迎へくれ
湖ほとり風をよるこぶ小判草

小判草 船越 美喜

遠き日の逢瀬の河原月見草
ほととぎす暁けの悲しき夢醒ます
梅雨雲を引張つてゐるクレインかな
向日葵のあつち向いてほい昏れにけり
円陣を解き球児散る炎天下

月見草 川崎光一郎



京鹿子集

豊田都峰選

しばらくは付き切りになる天瓜粉
有り余る程の薰風肩叩く

京都 武藤ともお

かげろふのまぎるる源氏香のなか
ふるさとは水田鏡のつらなりに
尺貫をつらぬく銚の真柱

亀岡 井上菜摘子

遊びせむ茄子はなすの花さかせ
空蟬や言葉がどれもぶかぶかす
寂寞とみぞおち河骨が咲けり
金雀枝や動体視力はからるる
雲の峰湧いて頬杖はつけせない

夏来るや蔵の壁拭く水かげろふ

京都 奥田 筆子

城あとは石のあつまり青蜥蜴
夾竹桃触れてひんやり大理石
身のうちの長い廊下や光秀忌
墓齒形ぐにやりと採られけり
夏の朝漕ぐ子の車輪大きくて
梅雨明けや隣人犬に青リボン
夕虹やブラジルよりの風来坊
外客は礼儀正しき夏座敷
冷素麵箸を巧みに米紳士

アリンナ 伊吹 之博